

英語教育の現状と今後

中田 康行・呂 麦銳・花井 克行・倉田 紀子・北村 英子
市川 亮子・王 中州・ハスミン・ペレス・ヒメネス

On The Present State of English Language Education and Its Future

Yasuyuki NAKATA, Mairui LU, Katsuyuki HANAI, Noriko KURATA
Hideko KITAMURA, Akiko ICHIKAWA, Zhongzhou WANG, Jazmin Perez JIMENEZ

はじめに

本年6月から筆者の研究室を中心に研究会を始めた。月に一回のペースでだいたい二時間くらいの会合である。2時間のうち、前半は各メンバーが順番に何かのテーマで報告し、後半は輪読形式で専門書を読むことにしている。「言語と文化を考える会」と称するものであるが、会名からもご理解頂けるように、言語と文化に関することならいかなることも研究テーマとして考えることが可能である。参加しているメンバーは現職の英語教員が多いという事情もあって、やはり話の内容は英語教育、英語学、あるいは言語的な話題が必然的に多くなっている。

さて、本稿は極めて学術的な内容というわけではなく、会に参加している者が外国語としての英語教育（あるいは英語学習、研究）を実践している中で常々抱えている、様々な問題意識を言葉で表す活動を通じて、更に問題点を深く追求する一つの契機になればという思いから筆を執った次第である。内容的には個人個人の執筆部分が独立したものと考えることも可能だが、全体を通して、やはり一つのまとまったテーマを追求したものとなっていると筆者は確信している。内容についての詳細は結論の部分に委ねるけれども、一言だけ、簡単に触れておきたい。言語教育の目的は学習者にその言語を様々なスタイル（堅苦しい言い方から砕けた言い方に至るまでの“variation”がある）とモード（書き言葉、話し言葉）で使いこなせる（即ちcommunication）基盤を提供することなのであり、そのことが全ての執筆者の話の中に様々な程度に表出されている。筆者たちの思わぬ誤解や過った見解などがひょっとして存在するかも知れない。読者諸先生のご叱正とご指摘をお願いしたい。（中田 康行）

I 中国における英語教育について

中国の英語教育は、1950年代に始まった。中華人民共和国設立後に始まったと思われる。当時は、中学1年から高校3年までの課程で行われたが、旧ソ連との関係もあり8割程度の学校は、ロシア語を授業に取り入れていた（学校により教える外国語が違う。大連の方は日本語が多い）。1966年に文化大革命が始まり、学生は地方の農村へ強制的に行かされた事があった。この間2年間ほど英語教育は停止されていた（学校自体が機能していなかった）。詳しくは、『ワイルドスワン』等の書物を参照して頂ければ幸いである。当時の英語教育は、共産党思想を題材としたものが多く、毛沢東語録とか海外の政治批判、また、個人批判など、革命に関す

る内容が多かった。(例えば、*Chairman Mao* 「毛主席」)、*class struggle* 「階級闘争」、*the Communist Party* 「共産党」等)。

近年の英語教育は、小学校3年から始まっている。しかしこの開始年齢は、地域によって違う。天津の場合は5年から始まる。しかし、最近、小学校1年から、口語英語を設定する学校もある。私立小学校では、外国人教師を招いたり(人数はとても少ない)、幼稚園でも英語教育をすることが有る。小学校の英語教育は、アルファベットから始まり、単語や文法の基礎を教育する。内容的にはたぶん、日本の中学1年くらいのレベルから始まるものと思う。天津では英語を話すことの出来る人が多く、易しいレベルであれば、高校程度の会話を行うことができる(今の30代前半の若者に限る)。大卒レベルの場合、容易な英語なら読み書きする上で、あまり大きな困難は無いだらう。

中国人の英語には、当然、中国語訛りがあるが、日本人の英語も同様に日本語訛りがある。そのため分りにくい、発音が悪いと言われる。どの国であれ、英語を外国語として学習している場合、(ごく一部の、英語を専門的に身につけた人間は別として)その母国語の訛りがあるのは已むを得ない。けれども、ある面では、確かに、中国での英語教育の方が日本の英語教育より進んでいるものと思われる。しかし、中国も諸外国同様、学校卒業と同時に学んだ英語から離れてしまう人たちも少なくない。

日本の大学と中国の大学における英語教育の問題点について考えてみたい。日本人は大学卒業までに10年間も英語を学んでも英語を話せないということがよく指摘されているが、これは大学での授業のやり方にも問題があると思われる。中国の大学においては英語の授業は英語で行われる。ところが、日本の大学の場合、*native speakers* は別として、授業を英語で行うか日本語で行うかは教員に任されている。しかし、実際のところ、日本人で、英語で授業をする教員は非常に少ないであろう。このことが学生の話せるレベルに少なからず影響を及ぼしていると思われる。

また、中国においては、国家によって話す活動があまり重視されていないことに問題がある。中国の英語教育についての基本姿勢で問題なのは、*native speaker* の教員を雇用することあまり積極的ではないことである。授業を英語で行うか中国語で行うかは教員に任されているという点で、日本と同じである。日本と同じように *grammar* を中心にやっている。

以下のことは、私の小学校教師として、また、自分が小学校から大学まで、10年間以上も英語を学んでいながら、英語を十分に話せないという、自分の経験から日本の英語教育の参考にして頂ける幾つかの問題点を考えてみる。しかし、偏った見方であるかもしれないので、読者諸賢のご指摘をお願いしたい。

中国の英語教育から参考にして頂ける点

- 1) 中国の場合、国語にしても、英語にしても、正しい発音、発声法を重視している。
- 2) 英語の授業では、教師が常に英語を使おうとしている。(中学校から)
- 3) 大学卒業時までに合格しなくてはならない英語試験があるので、大学入学後も学生は目的意識を持って勉強ができる。

中国の英語教育の改善点

- 1) クラスあたり人数が多すぎる。(重点的小学校の1クラスは最大時には70人を越えた。)
- 2) 英語教師の海外研修の機会がない。(小学校、中学校、高等学校の先生は海外研修の機会が殆どない。)

- 3) テレビで英語の放送が殆どない。(放送大学があることは事実だが。)
- 4) 外国人の教員が極めて少ないので、生徒が生徒の英語に接する機会が殆どない。
- 5) 話すこと、聞くことの教育を軽視している。

以上のことから中国の英語教育では native speakers が殆どおらず、学習者が生の英語に接する機会が殆どないという問題がある。中国は、同じアジアでありながら、食事の習慣、着る物等、日常生活のいろいろな点で日本や欧米諸国とは異なる国である。また、英語が話せればどこでも通用する可能性はあるが、そうでない場合も数多い。ある外国語が十分に出来なければ、その目標言語が話されている国に出かけても、残念ながら、通訳なしではわからないことだらけであるだろう。もしも、だれかが中国を訪ねたいと思ったとして、中国語で会話を行う基礎(謝辞、再見、多少銭?“How much is it?”等)もないまま、その人が中国に出かけてしまうと、その人は恐らく後悔すると思われる。

日本では今後数年の内に、小学校で英語教育が導入されると聞く。勿論、筆者は賛成であるが、小学校に英語教育の環境が十分に整わないまま、見きり発車しない方が良いと思われる面もあるのではないか。また、日本語(母国語)がある程度身についた学年から始めるべきだとも考える。中国の場合、例えば天津では小学校5年から始まるが、教材も天津市内に関連する内容のものである。その意味では、教材の内容が子供に理解され易いものと思われる。外国語を習得するには、母国語で養った語感が必要だと考えられるからである。日本では英語教材(教科書)が学校ごと、地域ごとに採用され、ばらばらになっているという状況を聞いた。全小学校で英語が導入されれば、中学校の指導が変わる可能性も出てくる。小学校における英語教育の先発国である中国の英語教育に見られる成功面と改善点、さらには教材、教育方法等も十分に知って頂ければ、必ず、日本の小学校での英語教育を考える上で参考になるものと確信している次第である。(呂 麦鋭)

II 三重大学附属中学校からの実践報告 - いわゆるコミュニケーション方略 (communication strategy) についての一考察 -

I コミュニケーション方略と英語授業

外国語を用いてコミュニケーションを行おうと思えば、目標言語についての十分な知識・技能が求められるが、学習者である中学校の生徒がそれらを持っているとは限らない。場合によっては未習であったり、既に学んだ事柄であっても忘れてしまっている場合がある。また、不注意等で話し相手の言葉を聞き逃したりすることもある。そこで、既知の言語知識を有効に効率よく使って、コミュニケーションを続けていくことが必要になる。

外国語学習者は、目標言語で実際のコミュニケーションを行おうとする場合、その言語知識の欠落部分を何とかして補おうとする。この言語運用上のメカニズムは応用言語学で「コミュニケーション方略」と呼ばれ注目されているが、学校現場での外国語教育にも示唆するところが大きい。コミュニケーション方略を実践する能力は、コミュニケーション能力の一部と考えられる。実際の外国語の授業で生徒がコミュニケーション方略実践力をいかに用いるかを観察し、その能力を訓練することによって、外国語によるコミュニケーション能力を高めることが可能だと考えられる。

II 三つの具体的実践例

本節では筆者の勤務する学校での授業を例に取り、そこで生徒たちにコミュニケーション方略の訓練が如何に行われているかを示したい。

II. 1 コミュニケーション方略として考えられるものには次の1)~5)のようなものがある。

- 1) 自分の分からない表現を別の表現で言い換えたり、相手に言い換えて貰ったりすること。
- 2) 相手の言ったことが分からなかった時に、相手に聞き返すこと。
- 3) 自分の言いたいことがすぐに浮かばなかった時に時間をかせぐこと。
- 4) 3)の延長として、話題そのものについて取り上げるのをやめてしまい、違う話題に移行すること。
- 5) ジェスチャーや絵を描くことなど、非言語的 (non-verbal) な方法を用いること。

4)も理論的には考えられるが、本論では言及しない。また、5)のような非言語的な方法を用いることは、実際のコミュニケーションでは、意志伝達に非常に有効な方法と考えられるが、本論では、言語的 (verbal) な方法だけを論考の対象としたい。

II. 2 授業における、コミュニケーション方略の具体的な発現例

ここでいうコミュニケーションとは、「聞く・話す」能力を想定しているが、データの収集は、生徒に書かせた英語 (の文) によって行った。書かれたものによってデータを収集しても、「聞く・話す」ことに通じるコミュニケーション方略の観察は可能であると考えたからである。

観察は、中学2年生を対象に、テスト形式で行われた。問題ごとに、与えられた日本語の課題を英語で表現して、意図する内容が通じるようにするものであるが、その課題の中に、中学2年生では明らかに未習の語彙を含ませておいた。そうしておいて、その「未習」部分を、どのように生徒が既知の語彙で表現し、意図する内容を通じさせようとしたかを観察した。ただし、ここでは前項1の1)「自分の分からない表現を別の表現で言い換える」というコミュニケーション方略を扱うことにしたい。以下に三つの具体的な実践例を提示する。

(具体例 1) 生徒に与えた指示は次のとおり。「あなたが先生になったとして、英語の通じる外国人の生徒に、日本の学校では「生徒は髪の毛を染めてはいけない」ことを英語で伝えてください。」「髪の毛を染める」という単語 (*dye*) は中学2年では未習語である。個人的にこの単語を知っている生徒はいたが、それを知らない生徒がどのように意図する内容を表現しようとしたかを観察した。以下に生徒たちからの解答例を列挙しておく。

- a) Students must not ブリーチ (bleach) hair.
- b) Students must not ソメル hair.
- c) Students must not ヘアーダイ.
- d) Students must not hair color.
- e) Students must not カラーリング hair.
- f) Students must not hair coloring.
- g) Students must not color hair.
- h) Students must not hair color change.
- i) Students must not make hair.
- j) Students must not ヘアー (hair) make.
- k) Students' hair must be only black.

これらの解答例におけるコミュニケーション方略は、以下のように分類可能と考えられる。

- 1) 類似した語句への置き換え。その明らかな例として a) Students must not ブリーチ (bleach) hair.、g) Students must not color hair.、j) Students must not make hair. が挙げられる。dye という単語を知らなくても、なじみのある *bleach, color, make* に置き換えた例である。
 - 2) 1)の置き換えにまで至らず、中途半端、あるいは非文法的ではあるが、自分で単語を推測し、意図するところを通じさせようとした。c) Students must not ヘアダイ (hair dye?) .、e) Students must not カラーリング (coloring?) hair.、f) Students must not hair coloring.、j) Students must not ヘアー (hair) make. のような事例では生徒たちは自分たちになじみのある、ヘアダイやカラリング・ヘアメイクという単語を取り込んで何とか文を構成しようとした跡が見受けられる。
 - 3) 既知の語彙等の言語知識を駆使して「染める」(dye) という単語の意味を説明した。次のような例である。h) Students must not hair color change.、k) Students' hair must be only black. h)の例は、2) の例ともとれるが、それを Students must not change hair color. とすれば、より文法的に適切な文となり、3) の好例となる。
 - 4) わからない部分を、母国語(日本語)に依存して表現した。例えば、b) Students must not ソメル hair. である。一番多かった解答例はこのようなものである。本来、外国語でコミュニケーションを行う場面で、発言の一部を母国語で表現するのは奇妙で、理解されないものである。だが、教育上は、次のように考えることが可能である。母国語(日本語)を全く使ってはいけないとなると、生徒は大きなプレッシャーを感じ、コミュニケーションそのものを諦めてしまう。さらに、相手の外国人も、日本語が殆ど分からないとは限らず、相手との協力でコミュニケーションを成立させようとする試みに通じる。これは、前項 II. 1 の 1) の後半部分に述べたコミュニケーション方略に通じるものであるから、このような例も教育的配慮から認めていきたい。
- (具体例 2) 「生徒は学校でお菓子を食べてはいけない」ことを英語で伝えてください。」という指示を与えた。この事例では「お菓子」(*sweets*) 等が未習語、さらに「持ってくる」(*bring*) も、この時点では新出単語と呼んでも良いくらい、定着が不十分であった。

- l) Students must not bring オカシ.
- m) Students must not have オカシ in the school.
- n) Students must not eat オカシ at school.
- o) Students must not bring foods.
- p) Students must not bring snacks.
- q) Students must not bring dessert.
- r) Students must not have junk foods.
- s) Students must not bring candy.

これらの解答例におけるコミュニケーション方略は、具体例 1 の場合にもそうであったように以下のような分類が可能だと考えられる。

- 1) 類似した語句への置き換えの例は o) Students must not bring foods.、p) Students must not bring snacks.、q) Students must not bring dessert.、s) Students must not bring candy. である。
- 2) 1) の置き換えにまで至らず、中途半端、あるいは非文法的ではあるが、自分で単語を推測

し、意図する内容を通じさせようとした例として、r) Students must not have junk foods. が考えられる。

3) 既知の語彙等の言語知識を駆使して自分の未知の語句を説明した例は、m) Students must not have オカシ in the school.、n) Students must not eat オカシ at school. である。

4) わからない部分を、母国語（日本語）に依存して表現した例。l) Students must not bring オカシ.、m) Students must not have オカシ in the school.、n) Students must not eat オカシ at school.

（具体例 3）この事例では「『映画を見に行くときは、生徒は（友達だけではなく）親と一緒に行かなければならない』ことを英語で伝えてください。」という指示を与えた。「親」（*parent*）が未習語、さらに「映画」（*movie, cinema*）等も、生徒にはある程度なじみ深い語であるが授業では未習であった。

- t) Students must go to movies with オヤ.
- u) Students must go to movie with mother and father.
- v) Students must go to movie with family.
- w) Students must go to エイガカン with オヤ.
- x) Students must go to movie with mother or father.
- y) Students must go to movie hall with mother.
- z) Students must not go to theater with friend.

具体例 1、2 の場合同様、これらの解答例におけるコミュニケーション方略も、以下のような分類が可能だと考えられる。三つの事例で殆ど同じような分析が可能であった。

- 1) 類似した語句への置き換えの例として以下のものが挙げられる。u) Students must go to movie with mother and father.、v) Students must go to movie with family.、x) Students must go to movie with mother or father.、y) Students must go to movie hall with mother.
- 2) 1)の置き換えまでに至らず、中途半端、あるいは非文法的ではあるが、自分で単語を推測し、意図する内容を通じさせようとした例は、y) Students must go to movie hall with mother. である。
- 3) 既知の語彙等の言語知識を駆使して自分の未知の語句を説明した例として、z) Students must not go to theater with friend. が挙げられる。
- 4) わからない部分を母国語（日本語）に依存して表現した例は t) Students must go to movies with オヤ.、w) Students must go to エイガカン with オヤ. であった。

Ⅲ 英語教育におけるコミュニケーション方略の位置づけ

コミュニケーション方略能力はコミュニケーション能力の一部と考えられる。目標言語でコミュニケーション（意志疎通）ができることが外国語教育の目的のひとつだとした場合、このようなコミュニケーション方略の力を訓練していくことも外国語教育には必要と考えられる。しかしコミュニケーション方略の力を生徒に付けさせるには、具体的に何をどう教えれば良いのか必ずしも明らかではない。教員にできることは、生徒にコミュニケーション方略実践力が発揮できそうな場数を数多く与えてやることで、結局、生徒自らその経験を頼りに、その実践力を伸ばして行くしか有効な方法はない。

加えて、コミュニケーション方略というのは、外国語だけではなく母国語を使用している時

に半ば無意識的に使われるものである。それ故、生徒はそのような力を母国語習得過程で身に付けているのであって、そもそも理論的に何を如何に「教える」ことができるのかという疑問が生じてくる。さらに、コミュニケーション方略の力がついたことを検証することも難しい。

上記の例のように、*dye* という単語を知らない生徒が、コミュニケーション方略を駆使して自分の意図したことを伝えることができたのはよいことである。しかし、外国語教育の場では、コミュニケーション方略を養わせることも含めて、もっと大きな枠組みで捉えられた教養としての外国語を学ばせる方が大切ではないかという問題がある。なぜなら、生徒が *dye* という単語をすでに知っていれば問題は起きなかったからだ。

コミュニケーションを、非常に重要だが、副次的な目的とする外国語の授業においては、以上の議論は妥当であると筆者は考えている。ただ、外国語の授業でコミュニケーションの力を訓練する場があるとすれば、その場でコミュニケーション方略実践力を訓練することは有効であることに疑いはない。それでコミュニケーション方略実践力を訓練する場を設けることはあながち不適切ではない。しかし、上記のごとく、そもそも、コミュニケーション能力を考える場合、具体的に何をどう教えれば良いのか明らかではない。結局、従来から言い習わされた「読み」、「書き」、「聞き」、「話す」というオールラウンドな能力の定着を目指す中でコミュニケーション能力を培わせるということになる。

IV コミュニケーション方略の授業での扱い方

III で述べたように、コミュニケーション方略実践力は、その力がついたという検証が難しいものである。授業で生徒を注意深く観察し、生徒がコミュニケーション方略を明確に発揮できた場面があったとしても、その生徒は既にそのような力を持っていたのかもかもしれず、生徒は授業でその力を「獲得」したのではなく、「発揮したにすぎない」のかもかもしれない。生徒の性格や環境の影響、さらに個人差も大きい。また、単語や文法を教えるのとは異なり、コミュニケーション方略実践力を伸ばすための具体的教授内容・方法ともに明確ではない。

以上のような事情ではあるが、ともかく、コミュニケーション方略の力を学習者が獲得できるような場を多く与えて、生徒が自分のコミュニケーションの力に自信をつけられるようにしていきたいと考えている。以下に筆者が実際に行った具体的な指導例を提示するが、その中の‘S’はStudent、‘T’はTeacherの略、ALTは「外国人教師」のことである。

(指導例 1) ある単語・表現を、既知の別の単語・表現で言い換える練習。(中学1年対象。バナナの絵を見せる。)

T: 連想ゲームをします。今から、ある絵を見せます。外国人講師の先生には見せません。みなさんは、その絵について説明し、外国人講師の先生が何の絵か当てられたら、よい説明ができたとしてポイントをもらいます。もちろん絵に描いてあるものをズバリ言ってはいけません。

S1: It's yellow.

S2: It's a fruit.

ALT: Is it a lemon?

T: No.

S3: It's long.

S4: We can むく... (おい、「むく」って英語でなんて言うんや)

We can peel, we can peel (it).

(指導例 2) 分からない言葉を聞き返す、あるいは尋ねる。(中学2年対象)

ALT: What food do you like?

S1: Ah…目玉焼きって?

T: Ask it to Kevin-sensei(ALT).

S1: Ah... what do you say “*medamayaki*” in English?

ALT: Sunny-side up.

S1: I like sunny-side up.

(指導例 3) 外国人講師との会話中、外国人講師の使う英語が自分たちの理解を超えるレベルになったとき、生徒たちは意図的に、外国人講師に聞き返したり、やさしく言い直して貰うことを求めたりして、コミュニケーションを確実なものにしようとする。(中学3年対象)

ALT: This living thing is a reptile.

Ss: ??

S1: Say it again, please.

ALT: This living thing is a reptile.

Ss: ??

S2: Rep... what?

ALT: A reptile (in a stronger voice and in a higher tone).

Ss: ??

S3: What is it?

ALT: A Reptile is the one like a snake.

S4: Like snake? 蛇のようなものって…。

(指導例 4) 言いよどんだ時に言葉をつなぐ。(中学2年対象)

ALT: Well, how about your answer?

S: Well... let me see... please, wait... I'm thinking now.

ただ、注意しておかねばならないことは、指導例2, 3, 4のような事例では「問題になっている部分の言語知識を生徒が既に持っていたら、コミュニケーション方略の力を実践する必要はなかった」ということである。ただし、外国語の習得の初期段階にある中学校の生徒が、当該言語の知識を常に十分に持っているとは考えにくい。

以上の議論を通して、いわゆる言語知識・技能を教える授業と、コミュニケーション方略の力を発揮させる授業とは、相対立するものではなく相補的なものであり、両者をバランスよく授業で扱うことが重要であると思われる。(花井 克行)

Ⅲ 日本の英語教育について

高等学校における筆者の英語教育の経験を基に日本の英語教育について述べてみたい。日本の英語教育の改善策については様々な観点から検討されてきているが、大きな改善はみられない。そのことは中学、高校、大学で英語を学んだ人の何人が、自分の英語力に自信ありと答えられるかを考えてみればわかる。真の英語力、すなわち英語で十分にコミュニケーションできる能力はなぜ簡単に身に付かないのだろうか。その理由について考えてみたい。

まず、学校における授業のやり方に問題がある。コミュニケーションが大切だと言われているにもかかわらず、依然として高校の授業はたいてい文法訳読方式で行われている。教師は教科書の英文を読み、重要語句や文法事項を説明しながら、その英文を日本語に訳していく。一方、生徒は殆ど黙って座ったまま、その英文を目で追い、板書された重要ポイントをノートに書き取りながら、半ば必至になって日本語訳を完成させる。このような授業形態では、生徒が英語を使ってコミュニケーションする機会は皆無と言っても良い。教師の説明や話で授業の大部分は終わってしまう。

また、仮に上記のような授業から脱却し、もっと生徒に活動させるような授業をしようと思う教師がいても、実際にはそれをやり通すことが難しい。なぜなら、それにはテストの問題と評価の問題が関係するからである。このような教師が同僚と同じ教科書を使って同一学年の生徒を教えているような場合、問題が生じてくる。他の教師と異なる教授方法が用いられているのに、同一形態のテストが実施されるとなると、どうしても生徒が不安になり、コミュニケーション活動重視の授業に対する信頼をなくしてしまう。授業で扱わなかった文法事項や日本語訳がテストに出題されているような場合に対処しにくいという問題が生じてくる。

次に、生徒の側に立って考えてみる。日本では英語の授業のみならず、殆どの授業が30～40人の生徒を同時に教えるという一斉の授業形態で行われている。従って生徒は指名されるまで自分から進んで発言することは少ない。普段からクラスメートや教師と意見を交わしたりすることに慣れていない。たいていの授業において、教師の発話量が生徒の発話量よりも圧倒的に多いと思われる。生徒に英語で発言させる以前に日本語でも、もっと発言させるような授業を行う必要があるのではないか。日本語で十分に自己表現できない生徒にどうして英語で自己表現できるのか、という素朴な疑念が沸いてくる。

日本においては、生徒たちが教室外で英語を使う機会が殆どないように思われる。そのこともなぜ教室で生徒たちが英語を使いたがらないのかを説明する大きな理由のひとつに挙げられる。つまり、生徒たちは自分たちの日常生活で英語を使わなければならない状況に出合う機会は殆どなく、英語でのコミュニケーション活動に対して極めて消極的になってしまっている。大学受験を終えれば、たいていの生徒は英語を勉強する意欲をなくしてしまう。また受験の準備だけを目的に英語を勉強してきた生徒は、英語が単に一つの教科目としての外国語に過ぎず、コミュニケーションの手段として捉えてはいない。

以上述べてきたような問題を改善するにはどうすれば良いのだろうか。まず、英語教師の意識を変える必要がある。英語の授業において教師が多く発言するのではなく、むしろ生徒に積極的に発言させる機会を多く与えなければ、生徒の英語でのコミュニケーション能力は付かない。また、教師は自ら研修をし、授業のやり方について考え、さらに自分の英語力を向上させる努力を払うべきである。教師が一致団結してやり方について工夫し、教師自身が努力している姿勢を生徒に示せば、生徒の態度もきっと変わると思う。

生徒の発言を増やすひとつの方法として、次のような方策が可能ではないか。クラスの生徒を4人から5人程度の幾つかのグループに編成し、日常生活に密着した話題などを英語で表現させるようなタスクを与え、グループ内で話し合いやコミュニケーション活動をさせる。そして、そのことについて後でまとめて発表させる機会を与えるというようなやり方である。グループ内では生徒たちの英語での発言に対するためらいも少なくなり、ひとりひとりが発言する機会が増える。またお互いに相談して課題に取り組む過程において様々な意見交換がなされる。

その後、発表させる機会をもてば、責任をもってその課題に取り組むようになるであろう。生徒に発表させる段階で、重大な間違いがあれば教師は指摘できるだろうし、クラス全体に重要な点を説明することもできる。

日本の場合、教室外で生徒が英語に接する機会は殆どないように思われるが、自らの姿勢を変えることでその問題はある程度改善される。たとえばALTにしばしば尋ねるとか、海外からの留学生と友達になること、インターネットを通して英語の情報を得ること、衛星放送で英語の番組を見ること、さらにはEメールによる情報交換などである。そのような機会を最大限に利用すれば、教室外で英語に接する機会は随分増える。

中国の場合、大学での英語の授業は英語で行われるという。また、大学卒業までに合格しなくてはならない試験があるということである。それはとても良いことだと思う。日本では大学受験のための英語ということ強調しすぎるあまり、大学に入学してしまうと学生が真剣に勉強しなくなる傾向にある。大学に限らず中学校や高校でも英語の授業は英語で行われることが望ましい。そうすれば生徒も英語が単に授業科目としての外国語というだけではなく、実際にコミュニケーションの手段として自らも使わなければならないことを身でもって知ることになる。また、受験について言えば、筆記試験だけではなく、口頭試験やリスニングテストなどを多く取り入れていけば、ほんの僅かの可能性かも知れないけれども、生徒に英語を使いこなせるように努力を促すことになるし、真剣な英語学習への動機を高めることにもつながるのではないだろうか。

日本における高校での英語教育の現状を、実際に改善しようと思えば、大変な努力と労力が必要である。言語が基本的にはコミュニケーションを行うためのものだ、といった言い方はいとも簡単に成される。しかし、日本の現在の一般的な社会状況を考えると、それを外国語の授業の中で実行し、授業外でも実践させることは容易なことではない。なぜなら、そこには上記のごとく、教師一人一人、学習者一人一人を含めた多くの一般人の外国語に対する心的姿勢の変革が求められるからである。それでも、改善可能なところから実践していかなければ、いつまでたっても現状を変えることはできない。教師も生徒もお互いに協力しながらよりよい英語の授業をつくり、all-roundな英語力の向上に努めることが必要である。

以上のような観点から、筆者の実践しているコミュニケーション活動を取り入れた授業実践の具体例を以下に提示しておきたい。

Lesson Plan

Topic: *What do you do?*

Pre-task

- a) Have the students learn some terms about jobs.
 ex. *work for, tour guide, part-time job, fast-food restaurant*
- b) Have the students listen to the following model conversation and have them practice it.
- c) Have the students pay attention to the underlined sentences.
 Jason: Where do you work, Andrea?
 Andrea: I work for Thomas Cook Travel.
 Jason: Oh, really? What do you do there?
 Andrea: I'm a guide. I take people on tours to countries in South America, like Peru.

Jason: That sounds interesting!

Andrea: Yes, it's a great job. I love it. And what do you do?

Jason: I'm a student, and I have a part-time job, too.

Andrea: Oh? Where do you work?

Jason: In a fast-food restaurant.

Andrea: Which restaurant?

Jason: A Hamburger Heaven.

d) Have the students fully understand the following paired interactions and have them practice them.

What do you do? I'm a student.

Which school do you go to? I go to the University of Texas.

How do you like your school? I like it very much.

Where does Andrea work? She works for Thomas Cook Travel.

What does she do? She's a tour guide.

What does Jason do? He's a student.

Task cycle

Task: Have the students be divided into some groups each of which four students belong to. Three students in each group will ask the other student some questions. They can ask such questions as follows:

What do you do?

Which school do you go to?

How do you like your school?

What subject do you like?

How many hours do you study in your school?

How many hours do you study at home?

What part-time job do you want to have in your free time?

Planning (Reporting): In each group the students will choose two representatives. One representative student will describe the other one.

(example)

She is a student.

She goes to Hisai Senior High School.

She likes it very much.

She likes English.

She studies six periods in her school and one hour at home.

She wants to work at a Hamburger shop.

Language focus

If students make mistakes, the teacher will correct them. Then, the teacher will have them practice the important expressions with interrogatives. This is because interrogatives require the conversational partners to reply to what is asked. (倉田 紀子)

IV 英語上達法についての一考察 - 「目標」と「忍耐力」 -

「中学校から英語を勉強して話せないのは、英語教育に問題があるからだ。」とよく言われる。日本人の平均的な英語力がどれくらいなのかを知る上で、TOEFLの結果が参考になるだろう。TOEFL Test and Score Data SummaryのComputer-Based Test Data for 2000-01では、Computer-Based Test（以下CBTと略す）の全世界の受験者の平均点が、212点（男性214点、女性211点）。オランダがトップでその平均点が300点満点中（Paper-Based Test（以下PBTと略す）の677点）、258点。アジアのトップは、平均点245点のインド、次いでシンガポール、フィリピン、パキスタン、マレーシア、スリランカ、ネパール、中国と続く。日本語を母語とする受験者の平均点は183点（PBTの513点）で、アジア諸国では23か国中22位である。しかしながら、CBTの日本での受験者数は60,746人で、全世界のCBT全受験者472,144人のおよそ13パーセントを占めているのである。ついで韓国の50,311人である。日本は、英語を公用語にしている国でもなく、日常的に英語を使うこともない。これだけ受験者の多い理由の一つは、恐らく留学目的だけでなく、英語力判定のためであると思われる。幅広い層の英語学習者がTOEFLを受験し、このような日本人受験者のTOEFLスコアの平均が、PBTに換算して500点を超える点数であることは、受け止め方によれば、日本の英語教育の成果ではないかと思われる。

さて、日本と同じく漢字圏で、英語が公用語になっていない中国は、アジアで8位に入り、受験者はCBTで17,644人いる。PBTと合わせると、中国の受験者は、世界1位で110,363人（16パーセント）、日本は2位で85,432人（12パーセント）である。ちなみに中国語は世界でも母語話者数、公用語話者数ともに、10億人で、世界一。また、中国語は、英語、フランス語、ロシア語、スペイン語、アラビア語とならび、国連の公用語のひとつでもある。このように優秀な中国の学習者は、いったいどのように英語を勉強をしているのだろう。

「言語と文化を考える会」での呂さんの報告によると、受験必須の級別の英語試験があるという。「目標」を持って継続的に英語学習をすることが動機付けになっているということを確認できた。日本の場合、英語学習は高校・大学受験が大きな目標の一つである。また、例えば、英検、TOEFL、TOEICも進学、就職には有利になる。三重県教員採用試験でも、中学高校の英語教員志願者の、1次専門教科試験免除の条件に、TOEFL 595点以上取得、TOEIC 860点以上取得、英検1級合格が、挙げられている。英語能力の判定基準として、これらの試験が使われるケースはこれからも増え続けるかもしれない。『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について』でも、英語教員の資質向上の中に、「目標設定」がなされており、毎日の分掌業務や教材研究で忙しく、英語を勉強する暇がないという言い訳は、今後は通用しなくなってしまう。「目標」と「忍耐力」のある英語学習の継続が、十分な英語運用能力の実現という結果につながるものである。

目標と忍耐力がなければ、そう簡単に英語は身につかない。英語は苦手だが、得意になりたいと思っている人は多い。毎日のラジオ講座の一日分のレッスンでさえ何度も繰り返さないと覚えられない場合もあるだろう。あるいは、人によれば家事労働でラジオを聞くことを忘れてしまうかもしれない。聞くだけで楽に英語が上達するという教材があれば、大量に買い込んで途中で投げ出したりしたような経験を有する者は、あながち筆者のみではあるまい。聞いているだけでは、わからない単語をすべて確認できるわけではない。

例えば、話し言葉に耳を慣らそうと思ってケーブルテレビに接続し、CNN テレビ等を見るのも良い。けれども、implicit な習得を期待して、なんとなく聞いているのがやっとなのであるかもしれない。また、人によれば、何冊もの英語雑誌や英字新聞を購読したりしている。しかし、そのような学習者であっても分からない単語を飛ばして読むこともある。読まないといけないものの総量の内 95%~98% の単語を知っていないと、内容理解が十分にできないということが様々な研究成果により明らかとなっている。仮にかなりの意味が理解できている場合でも、知らない語彙に出会う可能性は十分にある。そのような時、文脈の前後関係からその語彙の意味を推測してみることになるのだが、結局は過って理解される危険性は否定できない。英語に堪能になるための王道など無い。“Self-discipline” の一つの目標として、例えば、「英検 1 級」取得や、TOEFL の得点が 600 点を旨とするのも良い。そのような試験や、その練習を通して、ネイティブスピーカー並みとまでは行かずとも、それに匹敵するくらいの語彙量と、その正確な意味の把握が実現されることを期待したい。そのためには、日頃から相当量の英語に接し Mental Lexicon を豊かにして、現実の読み物の中で出会う未知の語彙の意味推測・解釈へのアクセスが格段に高まるように努力しないとイケないだろう。

語学上達に最も重要なことの一つは、反復学習による語彙・イディオムの習得だと理解している。新しい単語を暗記するには、6、7 回 (Clothers and Suppes, 1967) とか、16 回以上 (Saragi, Nation and Meister, 1978) の繰り返しが効果的とも言われている。文脈の中で 1 回しか出合わないような単語は、まず完全には記憶されないのである。Schmitt (1997) の vocabulary learning strategies の調査によると、中高生は written repetition を一番多く行うのに、大学生や大人になると、written repetition は少なくなる。年齢によって、strategy は、変化するようだ。上級者はそれで良いのだろう。しかし、単語カードやワークシートを見ながら声を出して何度も書く、暗唱する、といった英語学習初期段階のような学習方法が、何年たっても必要だと思う人もいる。

筆者は、ある高校で語彙学習の strategies についてのアンケートを実施したが、その結果はくしくも Schmitt (1997) の調査結果と共通するところがある。アンケートへの回答者である生徒たちの半数は「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」時に、語彙が一番重要であると答えている。アンケートに答えた 91 名の高校生のうち 87% の生徒が、実際に書いたり声に出したりして反復により単語を覚えている。3% がキーワード法を使用し、2% が接辞を利用している。receptive vocabulary を productive vocabulary にするために、intentional strategies は必要不可欠なものであるが、incidental strategies も学校の外での学習で期待できるかもしれない。guessability と retainability は、まったく違うものであり、単語を長期に亘って記憶するためには、様々な記憶術を含めた反復練習とコミュニケーション的な学習が重要である。

Reading と語彙習得は、相関関係がある。単語をたくさん知っていたら、reading も楽に行える。少なくとも 8,000 語知っていたら、たいてい文献の内容の 98% は理解できるのである (Nation and Coady, 1988)。例えば、英検 1 級の 1 次試験には、短文や長文の空所補充問題、長文の内容一致問題、大意要約問題、和文英訳問題、リスニング問題がある。どの問題も単語が分からなければ殆ど対処不可能であるかも知れない。そのような問題に十分答えられるためには、問題の如何に係わらず、その英文の総量の 98% 程度の単語を習得していなければならない。アジアで、英語が公用語になっておらず、日常的には、たいてい日本語を使い、まれにしか英語を話さないような生活をしている日本人が、外国語である英語を習得しようと思

えば、弛まぬ努力と並々ならない忍耐力・意志力が必要だ。そこで学習者は、適切な目標を定め、その目標が達成された時の喜びを想像しながら、勉強するしかないのである。

(北村 英子)

V On the Need for a Longer Period of Training in Teaching Practice

Through my twelve-year teaching experience in Japan, I've realized that the Japanese government should train those students who want to be teachers in the future more before they become teachers. Nowadays, university students who want to be teachers in Japan are required to have only a two-to-four-week teaching practice in their mother schools when they are fourth-year university students and they can teach at schools if they pass the examination for service. However, I don't think the length of teaching practice is long enough to improve teaching skills and understand what being a teacher is really like or what is demanded for being a teacher. In this paper, I would like to discuss the necessity of increasing preparatory teacher training before one becomes a teacher.

When I was a university student, I had only a two-week teaching practice in my mother high school. I wrote lesson plans, taught some classes, and received feedback from my tutor, but I didn't have much time to improve my teaching skills then. I studied the English language mainly at university and had to take extra courses such as pedagogy, law, educational psychology, social integration education, English methodology, and so on in order to get a teacher's license. In all the classes except for the English methodology class we just had to listen to the lectures and take notes. Professors provided us with lots of knowledge about education but not much practice. In the English methodology class, students were sometimes divided into groups of five or six students and every student in each group had to give a teaching demonstration to the other students in the group for about five minutes. I liked the idea of giving a demonstration, but I had such a chance only three times in the year.

So, the first few years in my teaching career were, as it were, like a teaching practice for me in a way. It was a repetition of trials and errors. For example, I had to team-teach with an ALT for the first year, but I didn't get much advice about team-teaching classes from other teachers in my school. At that time, team-teaching was quite new and many teachers didn't know what to do. So, I attended some meetings and went to libraries to find those books that might provide me with some ideas for team-teaching, and I taught my students in a way I thought would work. Sometimes, it was completely a failure and I had to think of another way to teach the same subject. I wished I could have had more teaching training when I was a university student before I became a teacher. Nowadays, first-year teachers have an advisory teacher in charge and get feedback from him or her, but teachers aren't trainees but 'teachers' for students. They have to be professional in teaching. Learners should get the most out of their teachers. Hence, I think those who wish to be teachers in due course should have a longer period of training before they become teachers.

In some countries students are required to have more training before they become teachers. For

example, in China, if one wants to become a teacher, he/she'll have to go to teacher training college for four years. Then, he/she can become a teacher automatically without an examination, which I think really motivates him/her to try hard to be a successful teacher. Another example is that British students who want to be teachers have to attend an initial postgraduate course in education, where they acquire a PGCE (Postgraduate Certificate in Education), for an extra year after graduation from university. (In Britain, students have three years at university.) They have to study their specialized subjects, subjects for the teaching profession such as homeroom management, minority or gender problems, and education of physically and mentally handicapped children, and so on, and surprisingly have a 120-day training at schools in Britain (or elsewhere). As far as the training at schools is concerned, each university pays a certain amount of money (about 1000 pounds per student) to the schools which the students are sent to. The government maintains a balance between supply and demand of teachers, and the students who finish the course and are qualified as future teachers by the government can apply for a school they want to work for and become teachers. However, in Japan, one neither has to go to such a university nor necessarily has to have such a long training to get a teacher's license. So, teachers in Japan are less experienced and tend to depend on other teachers when they actually get positions in schools. And this is why I think of the present situation as "risk-taking", because such people as haven't had a certain satisfactory period of teacher training are employed. I suppose the government should set up a rule that university students who want to be teachers have to spend half a year or a year in schools and have some preliminary teaching experiences before they become teachers.

In conclusion, I believe the Japanese government should set up a rule that those who want to be teachers in the future are required to have a teaching practice for a longer period of time before they are actually employed. It's misleading to think that they can train themselves after they actually get positions in schools, because teachers aren't trainees in schools and students should benefit from their teachers as much as they can. With more experiences, teachers would be more confident and skilled, and the higher level of teachers could possibly improve their students' proficiency in English. (Akiko Ichikawa)

VI College English Teaching in China

English, as one of the three main subjects (Chinese, Mathematics and English) of the National Matriculation Examination (the "3+X" system, in which "X" means different subjects for arts or science), becomes more important in college syllabus.

The College English Syllabus for non-English majors puts much emphasis on vocabulary, grammar and reading skills, because they focus on reading original documents related to their own fields of study and on using simple English as the media of communication during international academic exchanges. Accordingly, English Intensive Reading, Extensive Reading are required courses, and Listening Comprehension only occupies a small percent in the whole scheme of College English Teaching Program. College English taught to non-English majors is called Public English in China.

Non-English majors are required to pass Grade 3 and Grade 4 or Grade 4 only in the CET (College English Test) system in their first two years of college study. If one fails in the Grade 4 test after 2 years of study, he/she can still apply for a test before he/she graduates. But if he/she can not pass the test within 4 years of university life, he/she can only get a university diploma instead of a first-degree certificate when he/she graduates. But anyway, he/she can still take the test after graduation and get his/her degree certificate when he/she passes the test. Grade 6 in the CET system is the highest proficiency test for non-English majors. If one passes Grade 6, then English is optional for him/her in postgraduate examinations. Furthermore, in their job-hunting those holding a CET Grade 6 certificate are welcomed by employers. Therefore, the ultimate goal for non-English majors is to pass Grade 6 in the CET system in terms of English learning. In most universities, the Department of Public English is in charge of college English teaching and conducting of the nation-wide Grade 3, 4 and 6 in the CET program.

The Department of Foreign Languages or the Department of English is in charge of English teaching to English majors. Because the versatile linguistic requirements for English majors are different from those for non-English majors, the syllabi designed for English majors are different, too. The courses for English majors are much more detailed and specialist-oriented. Generally, they are basic courses including Intensive Reading, Extensive Reading, grammar, Listening Comprehension, Conversation, writing and translation in the first two years, and some specialized courses like “culture contrast”, “linguistics” and “literature” in the third and fourth years. Students at a Teacher-Training University can also take courses like Educational Psychology and ELT Methodology. All the courses for English majors are supposedly conducted in spoken English in classes for the sake of improving students’ listening and speaking abilities.

In different academic years, students are required to be more specialized in different aspects of English. First-year students should acquire correct pronunciation, and those in the second year make a lot of effort on vocabulary and on grammar. At the end of the second year, English majors are supposed to take Grade 4 in the EPT (English Proficiency Test for English Majors). It is an over-all check of what they have learned about English. In the third and fourth years students aim at improving their versatile English proficiency, i. e. listening, speaking, reading, writing and translation. Before graduation, English majors can take Grade 8 in the EPT program, the highest proficiency test for English majors. Although it is optional, almost all the English-major students (approximately 90%) will take the test, because it is an obvious advantage in their job-hunting if one holds an EPT Grade 8 certificate.

Universities are sometimes ranked in a nation-wide scale based on both the results of CET for non-English majors and those of EPT for English majors. Thus, teachers of English are constantly put under some kind of pressure of competition. The national ranking scale is a kind of symbol of teaching quality, but teachers are most relieved when there are positive feedback from employers praising their students’ competence.

Comparatively speaking, I might be able to say that Chinese has all the (or similar) phonemes of English (except θ and δ), and Chinese students naturally have a better pronunciation, but I could say that Japanese students have a better understanding of English. Chinese students make

good use of every opportunity to practice their spoken English such as actively talking to native speakers when possible, going to “English Island” (a kind of voluntary gathering for practicing spoken English). As there are few real chances to use English, university undergraduates (8 years of learning of English) can only conduct simple daily conversations. English majors are a little better. On the other hand, Japanese students, in general, seem to have more chances to use English. Thus, they have better comprehension of English. A clear piece of evidence is that a professor of English in university campus could speak to an English-major student in English, and he/she might also be able to respond to the professor in English. Of course, there are other reasons like a wide use of English (in a variety of degrees of appropriacy) in all aspects of life in the Japanese society, which, unfortunately in the worst case, might sometimes cause a serious misunderstanding on the part of native speakers of English. (Zhongzhou Wang)

VI How I teach English in Paraguay

Teachers generally seem to agree that motivation to learn a language is an important aspect of successful learning. The teacher’s enthusiasm plays a very important role in the classroom. Children normally have a little motivation in learning a new language in a classroom situation. They haven’t decided to learn it and seldom make any effort to remember or use the language presented. When the only language they hear in the classroom is English, their motivation naturally increases. This is why it is important for teachers to look for various ways to present the foreign language in the classes.

Starting the classes with a routine or an activity type that the students are familiar with is an effective way to make them realize that they are actually studying English. By this routine, students can capture everyday expressions and respond in an appropriate way, repeating sentences or following commands doing some Total Physical Response (TPR) activities warming up the environment of the class.

Because they are good at decoding, young children have little difficulty in understanding in the classroom. Allowing their partners to do the natural translation, the teacher does not need to do this job. In this way, letting their classmates do the natural translation in the mother tongue will help some of the students that can not decode the foreign language at first. If this is the case, it is important for teachers to give them feedback in order for them to understand what is said. Useful feedbacks at this stage include the teacher’s body motions, giving affirmative or negative responses with the body movements: a waving of the hands or nodding of the head, etc. With the feedback the students can realize when they do something in the right way or not, and their English is gradually improved.

Students are aware of everything that surrounds them, and they like to have actual experiences. This is the case particularly if they can touch actual entities. Therefore, the use of “realia”, real objects captures easily their attention. Useful and easy-to-find objects made of plastic, model toys and teddy bears, for instance, are of much help in presenting English in the class.

The use of the textbook is an everyday task, but implementing other materials are useful tools

to get a deep reinforcement in the student's knowledge. Useful materials are flashcards, pictures, tapes, CDs and multimedia. Recently, computers in the Computer Assisted Language Learning (CALL-Lab) facilitate the learning process of the students. Going to the CALL-Lab once every two weeks working with softwares connected with the lessons covered at the moment will be of a great help to students to develop their listening skills. The more incidental language they hear around them, the more opportunities there are for them to pick up the language in context. Students work one by one in the CALL-Lab in this way, and they can interact with the computer activities, working with earphones, and developing the comprehension skill as well.

The use of tales and stories are good for reinforcing the students' motivation and developing their vocabulary. Once students emerge in the story, they can take the roles of the characters and act out the story. In this way, students practice dialogues and role-plays.

To manage a group, especially with children, teachers have to communicate constantly with them, It is important for teachers to be always positive and to support good behavior of the students with nice comments. In this way everyone will be able to notice that. Therefore, teachers need to keep their directions of behavior simple, clear and specific: "now we work in silence", "talk quiet", "let us listen to...", "I like when...", "I need help to make silence", "thank you" etc. A very practical and effective strategy is to choose the magic word "listen" when the teacher needs an immediate attention.

Creating the atmosphere of a community and belonging to it is one of the important factors for a good class management. The classroom rules made together by teachers as well as students on the first day of the school year will let every member remember that we all, students as well as the teacher, are members of the same team, and as a team at the end of the game (school year) we all want to win! In this way the rules will remind the standards of a good, fair behavior.

(Jazmin Perez Jimenez)

VIII まとめ

本稿は英語教育について、あるいはその背景になっている、ある言語文化事情なども含めた論考を提供するものであった。本来、各セクションが一つの論文となっても然るべき性質のものであるが、執筆者たちに2、3ページを目途に要点のみを書いて頂くようお願いした。以下で簡単に各セクションの内容と、それが提示する問題等を述べておきたい。

最初の中国での英語教育事情についての小論は国家の社会情勢により、やはり中国での英語教育が過去50年に亘って非常に大きく影響を受けたという背景的事情が述べられている。それから、今日の英語教育の中で、中学以上の学校では英語教師が出来るだけ英語を使って教育しようとしている英語教育の現状、さらに英語のネイティブ・スピーカーの絶対的欠如等の問題点が指摘されている。

次の論考は、本学部附属中学校での英語授業における実際の実践例を報告・提示したものである。その中で、生徒がいかに自分たちの英語の知識の欠落部分を補ってALT（外国人講師）の先生とコミュニケーション活動を成功させようとしているかという様子が報告されている。さらには授業でのコミュニケーション方略の扱い方（とその難しさ）、外国語授業の基本的目

標などについて示唆するものとなっている。

三つ目では日本に於ける英語教育の現状が述べられ、それが今後いかに改善されるべきかという問題への提言が成されている。高等学校でのクラスサイズはやはりまだまだ40人近いのが現状で、そのような中でコミュニケーション活動重視の授業は実現しにくいこと、生徒が英語を単なる一つの教科目としての外国語と見なしてしまっていること、さらには英語教師の大半が未だに文法訳読方式（あるいは、それに類するもの）で教えている現状が述べられている。このような現状を打破するには教師、生徒ともに意識の変革が必要である旨が示唆されている。さらにコミュニケーション活動を実践させるための具体的な授業実践の一つのモデルが提示されている。

次の論考は学習者自らどのようにすれば、外国語への学習意欲・熱意を維持できるか、という外国語学習の基本的問題に関連する内容である。TOEFL受験者の数が日本は非常に多いこと、それが成績の平均値の低さに影響しているということが指摘されている。しかし、それでもかろうじて平均値が500点を超えるという事実は、考えようでは日本の英語教育が様々な問題を内に抱えながらも、あながち過ったものではなかったかも知れないことを示唆するものである、といった見解が示されている。中国は日本よりもTOEFL受験者が多いにも拘わらず成績の平均値は日本より遙かに良い。その理由は恐らく、最初の論考にも示されていたように、中国では大学卒業までにパスしないといけない国家的なレベルの英語能力試験があるという事実である。日本では、そのような国家統一試験などは無いから、何らかの試験（例えば英検など）を目標に自らを律して努力するしかない、旨が示唆されている。

次の英文による小論は、執筆者自らの経験を基に、一般論として日本の英語教師が成り立ての時期には明らかに力量不足、自信欠如の状態である傾向にある旨が述べられている。そのような状況を改善する方策として、大学生の時代に教育実習を現在の2～4週間ではなく、例えば、三ヶ月、あるいは半年くらいにするといった大胆な提言が成されている。現に例えば、イギリスでは、教師になるためには、大学院に行き、PGCE (Postgraduate Certificate in Education) というコースを修了しなければならないことが挙げられている。そのコースでは最低三ヶ月はある学校で教育実習（むしろ現場での研修）をしなければならない。そのような現場での経験を積めば、教師として採用された時にある程度の経験は既に持っているわけであるから、それなりに自信も持って教育に臨めるだろう、と示唆されている。

次のものは、中国の大学での英語教育の実情を述べたものである。中国では、大学生は英語専攻であろうと、無かろうと、卒業までにパスしないといけない国家的な統一試験（級別がある）が実施されている旨が述べられている。この試験にパスしなければ、“Bachelor”が貰えないこと等、卒業後であってもその試験に再挑戦し、パスすれば「学士号」が授与されることも併せて述べられている。日本の大学での英語教育の有り様よりは遙かに厳しい国家的教育政策が窺える。何を良しとするかは各国によって判断が異なるところであり、絶対的な基準など無い。しかし、四つめの論考でも示されていたように、単に数値で見ると中国のTOEFL平均値は日本のそれより遙かに良いことは事実である。無論この平均値は単に数値の上での問題に留まらない問題も示唆するけれどもここでは扱わない。

最後のものは、この小論の著者がパラグアイで行っている小学校での英語授業の実践報告となっている。授業は英語で行われる。英語という外国語をどのように授業で提示するかについて様々な方法が示唆されている。挨拶などのルーティーン。先生の英語による説明が分からな

い児童がいたら、その部分を友達が母国語で言い換えてくれること、及び先生のジェスチャーによる確認。教科書の内容に一致する具体的事物の提示。コンピュータ機器を用いた音声と画像による理解促進。更に授業での先生と児童との一体化が授業成功の秘訣である旨が示唆されている。

さて、以上が本論文の梗概である。言葉遣い、表現等は各人で異なっているけれども、総じて各論考が扱っているテーマはいかにして十分な語学力を教育する、あるいは自らの努力で身に付けるか、といった内容であった。それは取りも直さず、様々な局面でグローバル化が進む中、十分な（英語による）コミュニケーション能力を学習者に培わせなければならないこと、同時に「コミュニケーション能力」等という言い方が単なるお題目ではなく、切迫した問題であることをも指し示している。 (中田 康行)

参考文献

- 岩井千秋、『第二言語使用におけるコミュニケーション方略』広島、溪水社、2000。
大下邦幸（編著）、『コミュニケーション能力を高める英語授業 理論と実践』東京、東京書籍、1996。
中田康行、『応用英語学の研究』京都、晃洋書房、1997。
八田玄二、『リフレクティブ・アプローチによる英語教師の養成』東京、金星堂、2000。
ユン・チアン（張戎）、『ワイルドスワン』講談社、東京、1993。
Chomsky, Carol, *The Acquisition of Syntax in Children from 5 to 10*. Cambridge, Mass., MIT Press, 1969.
Clothers, E. and Suppes, P., *Experiments in Second-Language Learning*. New York: Academic Press, 1967.
Crystal, D., *Linguistics* (2nd ed.). London, Penguin Books Ltd., 1985.
De Villiers, P. A. & de Villiers, J. G., *Early Language*. Glasgow, Fontana Press, 1979.
Donaldson, M., *Children's Minds*. Glasgow, Fontana Press, 1978.
Dulay, H., Burt, M. & Krashen, S., *Language Two*. New York, Oxford University Press, 1982.
Mey, J. L., *Pragmatics: An Introduction*. Oxford, Basil Blackwell, 1994.
Nation, I. S. P. and Coady, J., Vocabulary and reading. In Carter, R. and McCarthy, M. (Eds.), *Vocabulary and Language Teaching*. Essex: Pearson Education Limited, 1988.
Romaine, S., *The Language of Children and Adolescents: The Acquisition of Communicative Competence*. Oxford, Basil Blackwell, 1984.
Saragi, T., Nation, I. S. and Meister, G. F., Vocabulary learning and reading. *System*, 6, 72-78. 1978.
Schmitt, N., 'Vocabulary learning strategies.' In Schmitt N, and McCarthy, M. (Eds.), *Vocabulary: Description, Acquisition and Pedagogy*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
Snow, C. E. & Ferguson, C. A., eds., *Talking to Children: Language Input and Acquisition*. Cambridge, Cambridge University Press, 1977.
Stubbs, M., *Discourse Analysis*. Oxford, Basil Blackwell, 1983.
Widdowson, Henry G., *Teaching Language as Communication*. Oxford, Oxford University Press, 1978.
Widdowson, Henry G., *Explorations in Applied Linguistics*. Oxford, Oxford University Press, 1979.

執筆者紹介

- 中田康行（三重大学教育学部教授）
呂 麦銳（中国人留学生、本学教育学研究科英語教育専修在学）
花井克行（三重大学附属中学校英語科教諭）
倉田紀子（三重県立久居高等学校英語科教諭、本学教育学研究科英語教育専修在学）

英語教育の現状と今後

北村英子（三重県立明野高等学校英語科教諭、本学教育学研究科英語教育専修修了）

市川亮子（三重県立四日市商業高等学校英語科教諭、本学教育学研究科英語教育専修在学）

王 中州（中国河南師範大学講師、本学教育学研究科英語教育専修研究生）

ハスミン・ペレス・ヒメネス（パラグアイから本学への海外教員研修留学生）